

平成 22 年 4 月 21 日現在

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2007～2009

課題番号：19330140

研究課題名（和文）ジャーナリストの惨事ストレスに対するケアシステムの構築

研究課題名（英文）Coping system program for journalists' critical incident stress

研究代表者

松井 豊（MATSUI YUTAKA）

筑波大学・大学院人間総合科学研究科・教授

研究者番号：60173788

研究成果の概要（和文）：

ジャーナリストの惨事ストレスをケアするシステムを構築するために、研究と啓発活動を行った。研究としては、報道機関管理職に対する面接調査、ダートセンターフェローに対する海外調査、新聞ジャーナリストに対する質問紙調査、上海における面接調査を実施した。啓発活動としては、海外の惨事ストレスケアの専門家（Cait McMahon、Neil Greenberg）の講演、日本記者クラブでの発表などを行い、ジャーナリストの惨事ストレス対策に関する提言を行った。

研究成果の概要（英文）：

Research and educational lectures has been conducted in order to build up a care system for Journalists' traumatic stress. Several researches has been conducted, such as, interview to broadcast journalists in managerial-position, interview to Dart Center fellow, questionnaire to Japanese newspaper journalists, interview to journalists and academics related to this matter in Shanghai. Educational lectures were held inviting specialists such as Cait McMahon from Australia and Neil Greenberg from United Kingdom. Also, at Japan Press Club the findings of the research were presented and the countermeasures for Journalists' traumatic stress were proposed.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	2,900,000	870,000	3,770,000
2008年度	4,000,000	1,200,000	5,200,000
2009年度	3,400,000	1,020,000	4,420,000
年度			
年度			
総計	10,300,000	3,090,000	13,390,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・社会心理学

キーワード：社会問題・ジャーナリスト・惨事ストレス

## 1. 研究開始当初の背景

消防職員や自衛隊員などの災害救援者が悲惨な現場で体験する惨事ストレス (Critical Incident Stress) に関しては、多くの研究が行われ、ケアシステムも普及している。しかし、災害現場や事故現場で同じように職務を果たすジャーナリストの惨事ストレスに関しては、国内では関心が払われず、研究もケアシステムもない現状であった。ケアシステムが整い、ジャーナリスト自身が体験する惨事ストレスを自覚し、組織がそのストレスをケアすることができれば、報道対象となる被災者・被害者を護る健康なジャーナリズムが育成されると期待される。

我々は、ジャーナリスト研究、広域災害被災者研究、航空機事故被害者研究、消防職員の惨事ストレス研究を経て、報道や取材によって被災者・被害者が傷つけられる事例に接するとともに、ジャーナリスト自身も取材にまつわるさまざまな問題によって苦悩し、ストレスを受けていることを知り、本研究に着手した。

## 2. 研究の目的

新聞社や放送局に在職するジャーナリストの惨事ストレスの実態を把握し、個人的・組織的ケアシステムのあり方を検討することを目的として、一連の研究活動を行うとともに、ケアシステムの試みとしてジャーナリストと連携しながら一連の啓発活動を行った。

## 3. 研究の方法

研究活動としては、下記のとおり 8 種類の活動を行った。

### (1) 報道機関の管理職などに対する面接調査

2007 年 8 月～2008 年 9 月に新聞社の管理職者 10 名、及び社団法人日本新聞協会と日本民間放送労働組合連合事務局に対して半構造化面接を行った。

### (2) ジャーナリストのストレスの専門家に対する海外調査

2007 年 11 月に国際トラウマティック・ストレス学会 (アメリカ・ボルチモア) に参加し、ダートセンターの関係者 (シアトル本部、ヨーロッパ支部、オーストラリア支部) および現役ジャーナリストである同センターのフェローに対して、ジャーナリストの惨事ストレスやその対策などについて聴取した。

### (3) 新聞社の取材・報道業務経験者に対する調査

2008 年 6 月～7 月に複数の新聞社を対象

に、取材・報道業務の経験をもつ管理職および非管理職 (記者、カメラマン等) に対する質問紙調査 (以下、新聞ジャーナリスト調査) を実施した。有効回答は、非管理職 291 名と管理職 102 名であった。

### (4) 中国ジャーナリストと研究者への面接

2010 年 2 月～3 月に四川大地震において取材・報道活動をしたジャーナリストと彼らのストレスを研究した研究者に対して、面接調査を行った。

ケアシステムの試みとしてのジャーナリストに対する啓発活動としては、主に下記の活動を行った。

### (5) Cait McMahon 氏の公開講演

2008 年 12 月 7 日に、東洋大学 21 世紀ヒューマン・インタラクション・リサーチ・センター (以下 H I R C) と共催して Cait McMahon 氏 (ダートセンターオーストラリア代表) を招聘し、「ジャーナリストと心的外傷」公開講演会を開催した。

### (6) 日本記者クラブでの発表

2009 年 2 月 25 日に日本記者クラブ研究会「ジャーナリストの惨事ストレス」で発表した。

### (7) Neil Greenberg 氏の公開講演

2009 年 12 月 12 日に、東洋大学 21 世紀ヒューマン・インタラクション・リサーチ・センター (H I R C 21) と共催して、Neil Greenberg 氏 (キング大学軍隊精神医学・教授) を招聘し、「イギリスの惨事ストレスケア」公開講演会を開催した。

### (8) ストレスケアのためのツール開発

ジャーナリストのストレスケアのために、資料や新たなチェックリストなどを開発した。

## 4. 研究成果

### (1) 報道機関の管理職などに対する面接調査

新聞社管理職は、新聞記者が惨事ストレスを被る存在である事は認めていたが、ケアの必要性に関しては、意見が分かっていた。惨事ストレスケアのための組織的な対策は実施されていない事が確認された。

### (2) ジャーナリストのストレスの専門家に対する海外調査

聴取の結果、記者の惨事ストレスについて認識が広がりつつあること、エディターが記者の惨事ストレスケアにおいて重要な役割を果たしていること、ジャーナリストとトラ

ウマに関しては、トラウマを体験した方への取材のあり方に関する問題とジャーナリスト自身が体験しうるトラウマの問題の両方を扱う必要があること、しかし、ジャーナリスト自身は後者の問題を認識することに強い抵抗があることなどが回答された。

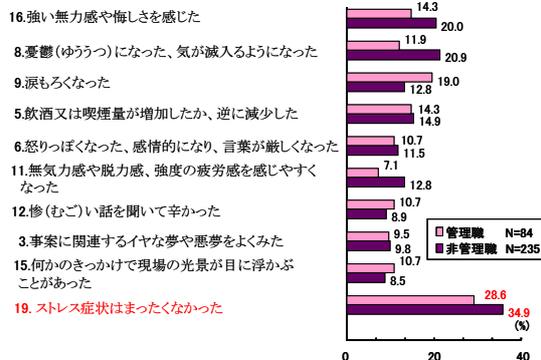
### (3) 新聞社の取材・報道業務経験者に対する調査

#### 1. 衝撃を受けた取材・報道事案

回答者自身が、取材や報道の過程で衝撃を受けた事案があるかどうか、またその事案の内容についてたずねた結果、「衝撃を受けた事案はない」という回答は約 17~18%にとどまっており、8~9割近い人が、取材や報道の過程で衝撃を受けた事案を経験していた。衝撃を受けた事案の中身については、「自然災害（地震、台風、水害など）を挙げる人が最も多かった。なお、これらの出来事を体験した時の職務は、約 8割が記者であった。

#### 2. 衝撃を受けた取材・報道後の症状

衝撃を受けた取材・報道後 2~3ヶ月間に生じた心理的あるいは身体的症状について尋ねた結果を図に示す。回答者の過半数が何らかの症状を回答しており、事案から一定期間を経過してもなお多くの人に自覚症状が残っていることが明らかになった。



### 図 衝撃を受けた取材・報道後 2~3ヶ月間での症状 (新聞ジャーナリスト調査)

#### 3. 調査回答時点での外傷性ストレス反応

現時点での惨事ストレス反応の有無を調べるために、改訂版出来事インパクト尺度 (IES-R) の得点を分析した結果、表 1 に示すとおり、新聞ジャーナリスト調査の管理職では、放送ジャーナリスト調査 (放送局に勤務する取材・報道業務経験者に対する調査、2006 年実施) と同様に約 5~6%が、新聞ジャーナリスト調査における非管理職では約 12%の人がハイリスク群 (25 点以上) であった。この比率は、IES-Rを用いた福岡市の消防隊員に対する調査 (ハイリスク

群 12.5% : 矢島ほか, 2002) や全国の消防職員からの無作為抽出による調査 (同 15.6% : 畑中ほか, 2004) に近い値であり、災害救援者と同様、ジャーナリストもまた衝撃的な取材・報道事案の体験によって惨事ストレスの危険性にさらされていることが明らかになった。なお、新聞ジャーナリストの非管理職の多くは記者であることから、現場取材を行う記者において、とくにその危険性の高いことが示唆された。

表 I E S - R 得点の結果

	N	range	M	SD	25 $\geq$
<b>放送ジャーナリスト</b>					
管理職	127	0-56	6.26	9.19	5.5%
非管理職	177	0-44	7.75	8.99	6.2%
<b>新聞ジャーナリスト</b>					
管理職	80	0-60	6.19	9.41	5.0%
非管理職	219	0-62	9.28	11.72	12.3%

### (4) 中国ジャーナリストと研究者への面接

中国の研究者との面接では、中国では必ずしも記者の心理的なケアや対策が行われていないため、ジャーナリストの惨事ストレス対策に関する研究が重要であるとの意見が得られた。中国のジャーナリストに対する面接では、中国でも日本と同様に、ジャーナリストへの惨事ストレス対策はほとんど行われておらず、衝撃的な事案の取材によって心理的・身体的負担を感じているという回答が得られた。とくに、実際に四川大地震の現場に赴き、最前線で取材をした方は、惨事現場での取材・報道の難しさ、それに伴うストレスについて強く言及された。

### (5)~(7) 啓発活動

記者クラブでの発表には 30 名程度の報道関係者が参加された。しかし、2回の海外研究者の講演では、いずれも研究者の参加は多かったが、それぞれ 3名と 10名のジャーナリストしか参加されなかった。ただし、参加された方の多くは、質疑や事後感想において、自身の惨事ストレス体験を語り、その意味を振り返っていた。

一部のジャーナリストは自身の取材・報道体験の中で、惨事ストレスを体験しているが、この問題に対する関心は高くない現状であると理解された。

### (8) ストレスケアのためのツール開発

ジャーナリストのストレスケアのために、ダートセンターのガイドラインを翻訳し、センターの許可を得て公刊した (現在はダートセンターのホームページ上に掲載されている)。また、新聞ジャーナリスト調査のデータに基づいて、ジャーナリストのストレスの

セルフチェックリストを作成し、ホームページ上で公開した。

### (9) ジャーナリストの惨事ストレスケアに関する提言

ジャーナリストの惨事ストレスケアシステムとして報告書（ジャーナリスト 201 名に送付）やホームページ上に、下記の対策を提言した。ジャーナリスト自身が個別にとるべき対策は、①惨事ストレスを理解するとともに、自身の心身状態を把握し自覚すること、②仕事の達成感を得るとともに、休息をバランスよくとること、③会話を中心とするセルフケアをすることである。組織としての惨事ストレス対策は、④パンフレットや講演や研修を通して、惨事ストレスへの理解を徹底すること、⑤上司による部下を支援する機能の強化すること、そのために上司に対するストレスの研修を実施すること、⑥専門家に紹介しやすいシステム作りである。

### (10) 成果の位置づけと今後の展望

研究成果は 14 件の雑誌論文、17 件の学会発表で公刊され、学会のシンポジウムも開催された。外傷性ストレスの国際誌 (Journal of Traumatic Stress) にも論文が掲載され、国内外の社会心理学研究者や外傷性ストレスの研究者からは一定の評価を受けた。

しかし、本研究が対象とするジャーナリスト自身からの反応は上記の通りであり、十分な関心を向けられているとはいえない状況である。このため、本研究が提言する惨事ストレス対策の有効性を検証するには至らなかった。

今後は、中国を含む各国との共同研究を行いながら、ジャーナリストの惨事ストレス対策を実行し、その有効性を検証することが課題となろう。なお、本研究は平成 22 年度以降も科学研究費の助成を受けて、上記の課題に継続して取り組む計画である。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕 (計 14 件)

1. 結城裕也・畑中美穂・福岡欣治・井上果子・板村英典・松井豊・安藤清志 (2010). 新聞ジャーナリストにおける職務上の自己開示—職階からの検討— 東洋大学大学院社会学研究科紀要, 46, 51-56. 査読有
2. Hatanaka, M., Matsui, Y., Ando, K., Inoue, K., Fukuoka, Y., Koshiro, E., & Itamura, H. (2010). Traumatic stress in Japanese broadcast journalists. *Journal of Traumatic Stress*, 23, 173-177. 査読有

3. 畑中美穂・松井豊・結城裕也・福岡欣治・安藤清志・井上果子・板村英典 (2010). ジャーナリストのための PTSD 予防チェックリスト作成の試み 筑波大学心理学研究, 39, 57-64. 査読有
4. 結城裕也・板村英典・安藤清志・井上果子・松井豊・畑中美穂・福岡欣治 (2009). 新聞ジャーナリストの惨事ストレス対策に関する意識 横浜国立大学大学院教育学研究科教育相談・支援総合センター研究論集, 9, 81-98. 査読有
5. 畑中美穂・結城裕也・福岡欣治・松井豊・安藤清志・井上果子・板村英典 (2009). 新聞ジャーナリストが経験する惨事の特徴とストレス反応 横浜国立大学大学院教育学研究科教育相談・支援総合センター研究論集, 9, 101-120. 査読有
6. 松井豊 (2009). ジャーナリストの惨事ストレス—記者の心身の変化に目を向ける新聞研究, 691, 71-75. 査読無
7. 福岡欣治・井上果子・安藤清志・畑中美穂・松井豊・小城英子・板村英典・結城裕也 (2008). トラウマとジャーナリズム: ジャーナリスト、編集者、管理職のためのガイド 横浜国立大学教育相談・支援総合センター研究論集, 8, 45-90. 査読有
8. 畑中美穂・福岡欣治・松井豊・安藤清志・小城英子・板村英典・井上果子 (2008). ジャーナリストの惨事ストレスに関する探索的検討 2—放送ジャーナリスト及び管理職に対する面接調査の結果報告— 横浜国立大学教育相談・支援総合センター研究論集, 8, 93-100. 査読有
9. 福岡欣治・安藤清志・松井豊・井上果子・畑中美穂 (2008). ジャーナリストの惨事ストレス— Dart Center 調査からみた海外でのストレス対策の動向— 東洋大学 21 世紀ヒューマン・インタラクション・リサーチ・センター研究年報, 5, 15-30. 査読有
10. 板村英典・松井豊・安藤清志・井上果子・福岡欣治・小城英子・畑中美穂 (2007). ジャーナリストのストレスをめぐる研究状況—日本におけるマス・メディア論及びジャーナリスト研究を中心に— 筑波大学心理学研究, 33, 29-41. 査読有
11. 小城英子・畑中美穂・福岡欣治・松井豊・安藤清志・井上果子・板村英典 (2007). 放送ジャーナリストの惨事ストレス対策に対する意識 横浜国立大学教育相談・支援総合センター研究論集, 7, 75-94. 査読有
12. 畑中美穂・福岡欣治・小城英子・松井豊・安藤清志・井上果子・板村英典 (2007). 放送ジャーナリストが経験する惨事の特徴とストレス反応 横浜国立大学教育相談・支援総合センター研究論集, 7, 95-117. 査読有
13. 福岡欣治・小城英子・畑中美穂・松井豊

- ・安藤清志・井上果子・板村英典 (2007). 放送ジャーナリストにおける日常ストレスとソーシャル・サポート—惨事ストレス対策に向けた基礎資料として— 横浜国立大学教育相談・支援総合センター研究論集, 7, 119-141. 査読有
- 14. 安藤清志・永井祥子・松井豊・宮田一雄・藤吉洋一郎・田中淳 (2007). 第5回シンポジウム メディアと被害者・被災者—よりよい関係を目指して— 東洋大学 21 世紀ヒューマン・インタラクティブ・リサーチ・センター研究年報, 4, 1-33. 査読無

〔学会発表〕 (計 16 件)

1. 福岡欣治・井上果子・松井豊・安藤清志・畑中美穂 (2010/3/6). ジャーナリストの惨事ストレス(20)管理職の惨事ストレス経験と部下の日常ストレスへの対応 日本トラウマティック・ストレス学会第9回大会総会プログラム・抄録集, 103. 神戸国際会議場
2. 結城裕也・福岡欣治・安藤清志・井上果子・松井豊 (2010/3/6). ジャーナリストの惨事ストレス(19)新聞ジャーナリストにおける惨事経験と惨事ストレス対策に対する意見との関連 日本トラウマティック・ストレス学会第9回大会総会プログラム・抄録集, 103. 神戸国際会議場
3. 畑中美穂・松井豊・安藤清志・井上果子・福岡欣治 (2010/3/6). ジャーナリストの惨事ストレス(18)放送ジャーナリストにおける惨事経験と惨事ストレス対策に対する意見との関連 日本トラウマティック・ストレス学会第9回大会総会プログラム・抄録集, 102. 神戸国際会議場
4. 福岡欣治・松井豊・安藤清志・畑中美穂・結城裕也・板村英典 (2009/10/12). ジャーナリストの惨事ストレス(17)—新聞社管理職における職務ストレスとソーシャル・サポート— 日本社会心理学会第50回大会・日本グループ・ダイナミクス学会合同大会発表論文集, 1008-1009. 大阪大学
5. 結城裕也・安藤清志・井上果子・松井豊・畑中美穂・福岡欣治・板村英典 (2009/8/28). ジャーナリストの惨事ストレス(16)—新聞ジャーナリストにおける職務上の自己開示— 日本心理学会第73回大会発表論文集, 249. 立命館大学
6. 福岡欣治・井上果子・松井豊・安藤清志・結城裕也・畑中美穂・板村英典 (2009/8/28). ジャーナリストの惨事ストレス(15)—新聞ジャーナリストにおける職務ストレスとソーシャル・サポート— 日本心理学会第73回大会発表論文集, 248. 立命館大学
7. 畑中美穂・松井豊・安藤清志・井上果子・福岡欣治・結城裕也・板村英典 (2009/8/28). ジャーナリストの惨事ストレス(14)—新聞

- ジャーナリストにおける外傷性ストレスの規定因— 日本心理学会第73回大会発表論文集, 247. 立命館大学
- 8. 畑中美穂・松井豊・安藤清志・井上果子・福岡欣治 (2009/3/15). ジャーナリストの惨事ストレス(13)新聞ジャーナリストが経験する惨事の特徴とストレス反応 日本トラウマティック・ストレス学会第8回大会総会プログラム・抄録集, 83. 東京女子医科大学
- 9. 福岡欣治・井上果子・松井豊・安藤清志・畑中美穂 (2009/3/14). ジャーナリストの惨事ストレス(12)新聞ジャーナリストにおける職務ストレス 日本トラウマティック・ストレス学会第8回大会総会プログラム・抄録集, 110. 東京女子医科大学
- 10. 結城裕也・板村英典・安藤清志・井上果子・松井豊 (2009/3/14). ジャーナリストの惨事ストレス(11)新聞ジャーナリストの惨事ストレス対策に関する意識 日本トラウマティック・ストレス学会第8回大会総会プログラム・抄録集, 110. 東京女子医科大学
- 11. 畑中美穂・福岡欣治・小城英子・安藤清志・井上果子・板村英典・松井豊 (2008/9/21). ジャーナリストの惨事ストレス(10)自己開示と精神的健康との関連 日本心理学会第72回大会発表論文集, 251. 北海道大学
- 12. 福岡欣治・小城英子・畑中美穂・井上果子・板村英典 (2008/4/19). ジャーナリストの惨事ストレス(9)放送ジャーナリストにおける職務ストレスとその関連要因 日本トラウマティック・ストレス学会第7回大会総会プログラム・抄録集, 100. 福岡国際会議場
- 13. 畑中美穂・松井豊・安藤清志・井上果子・福岡欣治 (2008/4/19). ジャーナリストの惨事ストレス(8)外傷性ストレス反応の規定因 日本トラウマティック・ストレス学会第7回大会総会プログラム・抄録集, 100. 福岡国際会議場
- 14. 福岡欣治・小城英子・畑中美穂・松井豊・安藤清志・井上果子・板村英典 (2007/9/23). ジャーナリストの惨事ストレス(7)放送ジャーナリストの日常ストレスとソーシャルサポート 日本社会心理学会第48回大会発表論文集, 392-393. 早稲田大学
- 15. 畑中美穂・福岡欣治・小城英子・松井豊・安藤清志・井上果子・板村英典 (2007/9/18). ジャーナリストの惨事ストレス(6)放送ジャーナリストが経験する惨事の特徴とストレス反応 日本心理学会第71回大会発表論文集, 146. 東洋大学
- 16. 小城英子・畑中美穂・福岡欣治・松井豊・安藤清志・井上果子・板村英典

(2007/9/18). ジャーナリストの惨事ストレス(5)放送ジャーナリストの惨事ストレス対策に対する意識 日本心理学会第71回大会発表論文集, 145. 東洋大学

〔図書〕(計1件)

松井豊(研究代表) ジャーナリストの惨事ストレスに対するケアシステムの構築 平成19-21年度科学研究費補助金基盤研究(B)研究成果報告書.pp 202

〔その他〕

報道関係

ニュースファイル 記者の「傷」のケア(2008年12月8日河北新報朝刊)

宮田一雄 オピニオン惨事ストレス研究から 記者はそんなに強くありません(2009年3月6日Fuji Sankei Business i)

ホームページ

<http://www.human.tsukuba.ac.jp/~ymatsui/index.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松井 豊 (MATSUI YUTAKA)  
筑波大学・大学院人間総合科学研究科・教授  
研究者番号：60173788

(2) 研究分担者

安藤 清志 (ANDO KIYOSHI)  
東洋大学・社会学部・教授  
研究者番号：50125978

井上 果子 (INOUE KAKO)  
横浜国立大学・教育人間学部・教授  
研究者番号：10242372

福岡 欣治 (FUKUOKA YOSHIHARU)  
川崎医療福祉大学・医療福祉マネジメント学部・准教授  
研究者番号：80310556

畑中 美穂 (HATANAKA MIHO)  
名城大学・人間学部・助教  
研究者番号：80440212

小城 英子 (KOSHIRO EIKO)  
聖心女子大学・文学部・講師  
研究者番号：60439510  
(~H20)